

人文会ニュース

1991.6

「知的迷宮」を彷徨うために

.....ジュンク堂書店京都店 福島 聡 1

〔人文書講座23〕

自己発見の心理学..... 大村政男 7

東欧・ドイツの書店を見て

.....朝日新聞社学芸部 上丸洋一 20

動き出した「出版VAN」..... 村上信明 26

91年度委員会活動について

..... 31

61

御茶の水書房

●戦争が外交が、決断迫られるアメリカ！
アメリカ外交の悲劇
 W・ウィリアムズ／高橋章・松田武・有賀貞訳 膨張主義外交を支えるフロンティア精神と万能主義の幻想を鋭く批判した外交史の古典 **4120円**
 ●戦後、日本国によって遺棄された人々の実情！！
サハリンからのレポート
 朴幸雄著／民友社編集 日本人と朝鮮人はこの歴史の負債と課題をどう引き受けるか（座談会）和田春樹／高木健一／李恢成ほか **2060円**
 ●民族の復権を求めて！！
風のめぐみ アイヌ民族の文化と人権
 チカツ・茂志子著 差別と闘いつづめられた彼女の主張は私達に民族の誇りについて深い感動を与え、日本人の生き方に課題を提起。 **2472円**

〒113東京都文京区本郷5-30-20 ☎03(5684)0751

有井行夫 ●著

¥5150 税込

株式会社 株の正当性と所有理論

「独自の社会的関係としての所有」の意義を精細に追究

永原慶二 ●著

¥2266 税込

日本中世の社会と国家

改増訂版・

現実的権力を失いながらなぜ天皇（家）は存続しえたのか

星乃治彦 ●著

¥2369 税込

東ドイツの興亡

西ドイツに吸収されたその歴史と今後の問題点を考える

青木書店

新宿区早稲田鶴巻町 538
 電話03-3202-3999 〒162

脳死と臓器移植

——日本人の選択——

水野 肇

いま国民に問いかける。脳死を人の死として認めるのか。脳死者からの臓器移植は是か非か ▶1600円

愛するといふこと

新刊書

E. フロム ◆ 鈴木晶訳

真実の愛とは、現代の愛の危機とは——「愛」を真剣に考えたい人に贈る世界的ベストセラー ▶1300円

紀伊國屋書店

出版部：東京都世田谷区桜丘5-38-1

☎03(3439)0128(営業) 表示価格は税込み

戦後最大の政治神話に挑戦する

徹底検証 昭和天皇 「独白録」

藤原彰／栗屋憲太郎
 吉田裕／山田朗著

太平洋戦争の敗戦直後、宮中奥深く5人の側近を前にして昭和天皇は何を語ろうとしたのか。「独白録」に秘められた意図はなにか。4人の歴史家が縦横に論じる注目の書。

46判カバー・1340円(税込)

大月書店 東京都文京区本郷2-11-9
 電話03(3813)4651<代表>

「知的迷宮」を彷徨うために

さまよ

ジュンク堂書店京都店

福島

聡

はじめに

おそらく、この文章を書くに当ってぼくに期待されているのは、これまで一〇年にわたって人文書を扱ってきた経験の中から、この文章を読まれた書店員や出版人、とりわけ若い人達の参考になるようなトピックを選び出して、できるだけ具体的に紹介することでしょう。もし、ぼくのささやかな経験が、誰かの役に立ったり、何らか

のヒントになるとするならば、それはぼくにとっても望外の喜びであり、具体的な方法論を申し述べるにやぶさかではなく、また具体的な数字を挙げて叙述することに何のためらいもありません。

しかしながら、具体的な過去の経験の開陳が、本当に誰かの役に立つのか、何らかのヒントを与え得るのか、ぼくには甚だ疑問です。その理由は、ひとつには、時代や社会状況はめまぐるしく変化し、過去のある時点で成

功した方法論が今なお通用する保証は全くなく、また、さらにいえば、過去を振り返ってみても、ぼくのやってきた仕事のどういう部分がよい結果を生み、どういう部分が失敗だったのか、ぼく自身にもはっきりしているわけではないからです。

むしろ重要なのは、今現在のぼく自身の問題意識がどういったところにあるのか、将来に向けてどういう展望をもって仕事をしているのかを率直にお話し、ともに考えていくことではないかと思うのです。現在のぼくの問題意識、仕事のありようの中に、過去の経験は集積されている筈で、それらを率直に述べることのほうが、かえって正確に経験を反映させることになるような気がします。あえていうならば、ひとりの書店人の成功例、失敗例をできるだけ具体的に知ることが速効性をともなうと考えること自体が、悪しき「経験主義」の錯覚ではないでしょうか。多くの具体的な経験から得られた彼の、仕事に対する問題意識、一般的な姿勢からこそ、さまざまな現場で汎用性のあるヒントが得られるのではないでしようか。

いまいったような理由で、ぼくに執筆を依頼した編集

部の期待（おそらく最初に書いたようなそれ）は重々承知しながら、あえて「オレ流」を貫かせてもらうことにします（折衷的なものも考えないではなかったのですが、中途半端になると思い、断念しました）。前半部では人文書販売に当ってぼくが常に念頭に置いていることを、後半部では特に今課題としていることを申し述べる所存です。

「人文書」なんてない？

いきなりセンセーショナルな表現で恐縮ですが、まず肝に銘じるべきことは、「人文書」なんてない、ということです。哲学書があります。歴史書、宗教書、もあり、心理学書もあります。しかし、「人文書」一般というのは、ないのです。

おそらくは、「人文書」担当が管理する本たちの多くは、自らが「人文科学」という範疇におさめられていることに、不満を感じていることでしょう。「科学」という言葉は、人類の悠久の知的営為の歴史の中では、近代以降、それこそごく最近になって漸く脚光を浴びるようになったに過ぎず、「自然科学」、「社会科学」、「人文科

学」といった枠組もまた、一九世紀の実証主義的思想潮流の中から生まれてきたものに過ぎません。所謂「人文書」の中には、近代よりずっと時代をさかのぼる知的遺産、あるいは実証主義的潮流に異を唱えるものも多く、否むしろそういったものこそ「人文書」の主流を占めているといつて過言ではないでしょう。また、現代哲学で言うならば、例えば現象学や科学哲学などは、科学の基礎づけそのものを主題のひとつとしているわけですから、自らがその科学の一部門と見做されることを潔しとする筈がありません。

一方「人文書」とはくの本である。」などと統括できる属性も、およそ存在しません。「人文書」の棚をちょっと思い浮かべるだけで、そこに収められた本たちの、それぞれに拠つて立つ視座や方法論が、どれだけ多様でバラバラであるかが分かります。「人文書」なんてない、と言ひ切る所以ですが、宗教書の棚など、もし本たちに意思と手足が備わつておれば、血で血を洗うバトルロイヤルの修羅場と化すことでしょう。哲学・思想や、歴史書の棚なども、程度の差こそあれ、同じようなことが言えると思います。

つまるところ、「人文書」の集合は、補集合としてしか定義できないのではないか、というのが、差し当つての結論です。すなわち、自然科学にも属さず、社会科学にも属さず、文学作品でもなく……、云々、それが「人文書」だ、というしかないわけです。そこに「人文書」を扱う難しさと、魅力があります。

何でも知つてやろう

そうした、^{オジタイフ}実定的な定義が不可能な「人文書」を扱う上で、心得とすべきことは何でしょうか。もちろん、「実定的定義不可能」な集合を相手にするわけですから、万能薬的な方法論が、ある筈はありません。しかし、小田実さん風にいうと、「何でも知つてやろう」という姿勢が、何よりも大事であることは、間違いないと思います。

それは、人類の知的営為の迷宮に恐れることなく踏み込んでいく勇氣であり、迷宮の中を突き進んでいく好奇心です。入口はどこでも、どっちの方向に迷い込んでも構ひはしません。定義づけさえ不可能な「人文書」の森に、抜け道や優先順位などある筈もないからです。

「そんなこといわれても、どこから手を着けていいのか分からない。」という人は、目の前にある入口に気が付いていないだけだ、と敢えて申し上げましょう。その「入口」とは、我々が日常的に出会う、「厄介な問い合わせ」です。

出版社、著者、書名がはっきりしている商品を探し出すのは、誰にでもできる簡単な仕事です。現在出版されているかどうかも定かでない作品、どこをどう捜していいのか最初は見当もつかない史料や論文、どういった商品が最もそれにふさわしいのか判断の難しい読者の要求、そういった書店員泣かせの、しかもおそらくは（補集合という性格上）「人文書」担当者がぶつかることの最も多い「厄介な問い合わせ」こそ、知の迷宮に踏み込んでいく格好の「入口」であり、それらに応答することが出来ないうえ、あるいは少なくともそれらにぶつかっていく勇気を持たないで、「プロの書店人」を名乗ることはできないと思います。よく、「ドラゴンクエスト」などのロール・プレイング・ゲームを引きあいに出すのですが、強い敵と戦ってこそ「経験値」はアップするのです。逃げ回っている間は、成長がないのです。

何も素手で戦え、といっているわけではありません。

書店の店頭は、武器の宝庫であることを忘れないでいただきたい。我々が扱っている商品そのものの中に、強力な武器は存在しているのです。お客様のおっしゃる言葉がわからなければ、辞書を引いてもいい、専門的な事典にあたってみてもいい、聞いたこともないような著者名であれば人名事典を利用してみてもよいのです。商品としてでも、見本としても百科事典を置いている店であれば、そこまで行って開いてみれば、それは大きな武器となります。

普段から、色々な分野の概説書を実際に読んでおくのも、いざというときに役に立つでしょう。最近とくに目だった「ブック・ガイド・ブック」や、本の紹介誌などに目を通しておくのも有効かもしれません。

商品以外にも、新刊案内や各社目録（統群書類従完成会の目録などは、史料検索に非常に便利です）、PR誌など、身の回りに材料はいくらでもあるのです。それらを利用して自らの力量を高めていく意思があるかないかに、プロの書店人としての資質が問われているのだと思います。

プロとして給料をもらっている以上、われわれには書店人としての技術（SKILL, ART）を磨き、それを提供する義務があります。そうした中で、人類の知的遺産により深く触れていくことで人間としての成長も伴っていくならば、それこそが書店で働く喜びだといえないでしょうか。

そうした意味で、ぼくは最近、書店のワクを越えた勉強会みたいなものを提唱し、個人的に親しい出版社の営業の人に無理を言って書店人有志と編集者が話す機会を何回か持ってきました。これからそうした繋がりを、著者や評論家の方々とも持っていきたいと思っていますし、また一緒に勉強していく仲間の輪を（特に若い人達の間）拡げていきたいと考えています。そこで、人文会への希望ですが、そういったことを会としても考えていただけではないでしょうか。意識ある書店人の育成は、通常の宣伝広告や、ましてや懇親接待などよりもずっと有効な先行投資になると思いますが、いかがでしょうか。

なんだか、予想以上に一般論に終始してしまいました。しかし、ここに書いたことは、「人文書」担当者として、さらにはおよそ書店人として最初に押さえておかねばな

らないことだと信じています。今年六月、三一書房から『書店人のしごと』という多くの著書が発行されました。宣伝めいて恐縮ですが、各論はそちらをご参照ください。

現在のぼくの問題意識と係数感覚とファジィ

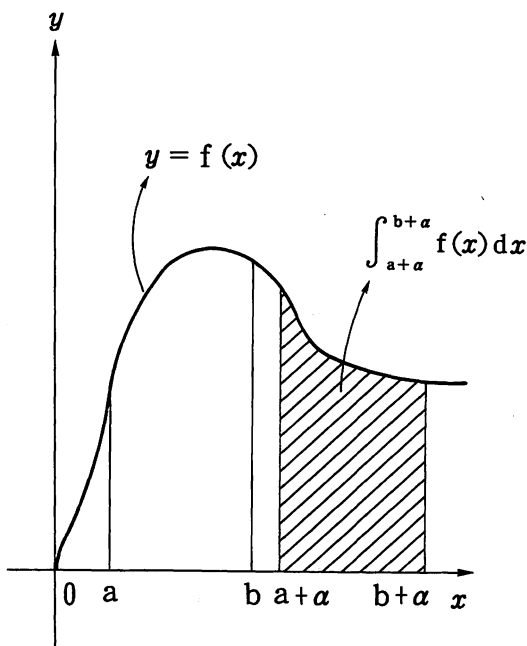
今年の二月、岩波ブックセンター社長の柴田信さんが『ヨキミセサカエル』（日本エディタースクール出版部）という、素敵な本を出されました。特に若い書店人にお勧めしたい一冊ですが、その本の中で、柴田さんは繰り返して「計数感覚」の重要性を強調しておられます。その「計数感覚」をより具体的に考えてみたいというのが、現在のぼくの課題の一つです。

そのために、解析の方法がもっと有効に使えないか、と考えています。たとえば次のグラフのようにある商品のx日目の売れ行き予想冊数 y が関数 $y=f(x)$ で与えられた場合、商品入荷までにa日かかるとして、a日目とb日目に追加注文をするとすれば、注文数は

$$\int_a^b f(x) dx$$

となる、というようなことを真剣に考えたいと思っています。

るのです。売れ行き良好書の場合は、重版ベースも考慮にいれなければならないでしょう。また、さまざまな要因が売れ行きに影響する本の場合関数 $f(x)$ の確定が非常に難しいことも分かっているつもりです。しかし、いくつかのデータを統合すれば、近似的にはある程度の確定が可能ではないかと思うのです。



また、ファジイ理論の応用にも興味をもっています。紙幅がないので詳論出来ませんが、ひとことでいうと、書店というものは、ある商品がどのジャンルに収められるべきか、そしてある商品が今その書店にあるかどうかという、二重のメンバーシップ関数を持った書籍のファジイ集合と言えるのではないかと考えているのです。常備、平積み商品の決定などにも、ファジイ理論の方法が応用できると思います。ファジイ理論においては、ひとつの商品が、さまざまな項目においてメンバーシップ関数値を持ち、どの項目に重きを置くかによって優先順位が変わってくるからです。書店SA化が叫ばれる今、各書店が個性を失わない、むしろより差別化される合理的の方法論として、ファジイ理論に期待する所以です。現在のぼくの課題をあえて足早に申し述べたのは、ともに考えてくださる同志を求めていることだということを、最後に書き記しておきます。

自己発見の心理学

大村 政男

人間にはギリシア時代からの宿題がある。その宿題は紀元前から持ち越されてきたもので、二十世紀の現代にいたってもまだ解決されていない。ごく少数の人びとは解決したと思っているかもしれないが、それが果たして正答だったか、どうか、まったくわかっていない。宿題は次の世紀に持ち越されることは確実である。あの「ヘラクレスの結び目」や、アレクサンドロスが剣で断ち切っ

たので有名な「ゴージアスの結び目」とともに、「ホモ・サピエンスの結び目」と呼んでもいいほどの、解くことのできない宿題といえると思う。その宿題というのは文章にしてみると実に簡単なものである。日本語でたった六文字にすぎない。「汝自身を知れ」、である。

このことはソクラテスがいったように思われているがそうではない。ギリシアのデルフォイにあったアポロ

ソンの神殿のどこかに彫り込まれていた文句である。ソクラテスはこのことばを自分の活動のモットーとしていたといわれる。それなら、彼は自分自身を知ることができたであろうか。おそらく知ることができなかったと思われる。それは彼の有名なことばに、ものごとを知っているつもりの方が実は本当になにも知っていないことを知って、あらためて真実の知識を求めなければいけないというくだりがあるからである。これでは「汝自身を知れ」ということばは、救世軍の太鼓のようにむなしなものになってしまう。しかし、それでいいのかもしれないと思う。人間は、永遠に「未知との遭遇」を願望している、それでいいのかもしれない。映画では巨大な美しい宇宙船が出現したが、ようやく見出した「汝自身」はとんでもない代物かもしれないからである。

「不思議な眼鏡」の物語

むかし見たテレビドラマの話である。それは「不思議な眼鏡」という題で、心理学的にも非常にすばらしかったので、いまでも鮮明に覚えている。その粗筋を書いて

みよう。

ある男が小さな四角いレンズを持った眼鏡（よく老眼鏡にあるあの形である）を拾う。その眼鏡の側には一人の男が死んでいる。なにか悶え死んだようなかたちである。眼鏡の形に興味を持った男はちょっとかけてみる。すると面白い現象が起こってくる。他人の思っていることが聴こえてくるのである。そこで、ゲームにも連戦連勝という幸運に恵まれる。彼がそこでやめていれば事件はなかったし、このテレビドラマが作られる意義も湧き出してこない。男は探求心が強かった。その眼鏡で「自分の知らない本当の自分」を見ようとしたのである。他人の隠していることがわかるならば、自分が隠している自分（自分でも知らない心の世界）も知ることができだろう——ということになる。彼は眼鏡をかけて鏡と向かい合う。電燈を消してローソクを立てる。こういうことを書いてみるとゾーッとしてくる。皮膚の表面温度は確かに下がっているのである。想像しただけでも鬼気身に迫る光景といえよう。

男はまんじりともしないで鏡の中の自分と向かい合っている。どうなるか、どうなるか、男も、テレビ画面を

見ている人もそう思っている。長い、長い間、変化は起こらない。時計はどんな時を刻んでいく。

ある時刻、鏡の中の男の顔が揺れはじめる。水面に映った顔のように崩れてくる。そして、その崩れがおさまったとき、鏡に醜惡な顔（それはドロドロになった豚のようなものだった）が現われてくる。男の内面にあった「自分の知らない本当の自分」が露^{あらわ}わになってきたのである。男は悶死してしまう。彼の死体の側に小さな四角いレンズを持った眼鏡が転がっている。テレビはその眼鏡を大写しにし、次に起こるべき不幸な事件を暗示して終わってしまう。

ようやく発見した「汝自身」はこんな醜いものなのであろうか。

「人間」に警告した三人の学者

エーリッヒ・フロムは「人間」に警告した三人の学者をあげている。その三人というのは、マルクス、ニーチェ、フロイトである。フロムは、マルクスは「人間の生理的欲求も社会の様相によって規定される」ことを人びとに

教え、ニーチェは、キリスト教的な道徳を奴隷の道徳だと決めつけ、「権力を求めて懸命に生きようとする人間の道徳」を称^{たた}えている。これがいわゆる「超人の思想」につながり、ファシズム的な世界を出現させることになるのだから皮肉である。三人目はフロイトである。フロイトは、人間を火山の噴火口に連れているって、ごうごうというすさまじい音をたてて煮えたぎっているマグマの世界を見せた人である。フロイトは人間性の深奥を暴露し、男性たちを驚かせ、女性たちを赤面させた。この深奥こそ、ある男が「不思議な眼鏡」で見た自分なのである。フロイトはこの醜惡な深奥に対して「エス」、あるいは「イド」という名前を付けている。この「エス」という語はドイツ語で「それ」ということである。「わたしは『それ』を抑えることができない」の「それ」に当たっている。エス（あるいはイド）は、反社会的な存在で快楽原理によって人間を動かそうとする悪魔であるが、フロイト劇場の主役である。主役ではあるが、多くの人びとはこのエスをあまり好んでいない。フロイトは人間性に対してリアルすぎるのかもしれない。自己発見の心理学は、彼を始点にしているとわたくしは思うのである

が、そのリアルさのために元祖をユングに譲らなければならなかったのではないだろうか。フロイトはそのリアリティのために敬遠され、ユングはそのロマンチズムのために愛される——ということはうなずけるような気がする。フロイトの顔の厳めしさにくらべてユングの顔には優しいムードが漂っている。若いころの彼は「金縁眼鏡の気障な男」だったが、フロイトのもとを離れたあとの彼は「自己発見の心理学」の優れた使徒と呼ぶことができる。顔に刻まれたしわの一本一本が、ホモ・サピエンスの苦悩を物語っているように思えてならない。だれか、内村鑑三の真似をして、「わたくしはJ（日本的なもの）とJ（キリスト）とJ（ユング）の三つのJを愛している」といわないかな……。

不安の時代と心理学

現代は「不安の時代」であるとか、「不安が露わにされた時代」であるとかいわれている。確かに不安ということばは恐怖ということよりも優れて現代的である。湾岸戦争によっていやっというほど思い知らされたハイ

テク戦争についての不安、一千年以上にも及ぶ宗教的抗争の不安、ビュロークラシーがびっしり布きつめられた職業生活の不安、非人間的なアーバンライフの不安、現代社会はまさに「不安の金太郎あめ」である。どこを切っても不安だらけになっている。その不安は、空にもくもく昇っていく積乱雲のようなものともいえるし、水の中にどんどん染みていくブルーブラックのインクのようなものともいえる。前者は外界に対する不安で、後者は内界についての不安である。現代人は内憂外患ともこもいたる——という不安の時代で、ロボットマシンのように常同行動を展開している。これではいくら自我のスペアがあっても足りたものではない。

現代は不安の時代——といっても、人間が不安を感じなかった時代が歴史的に見て果たしてあっただろうか。人間は泰平の世でも、恐慌や戦乱の時代であっても、いつも不安を感じているのである。一人ひとりの人間のあるモメントにおける行動や、その生涯にわたる発達は、すべて不安の潮流からくる衝撃を反映しているといっても、決してさしつかえないと思う。「不安」は現代社会を端的に表現するキーワードであり、かつ現代社会で最

も幅をきかせている現象であるが、それは大むかしから人間とともにあった——もののなのである。

不安は人間を宗教に近づける。人間は宗教的動物であるともいえる。平安時代の貴族や念仏行者は、阿弥陀仏^{あみだぶつ}来迎^{らいおう}の絵をかかけ、その指から垂らされた絹糸をしっかり握ってあの世に迎えられていった。現代宗教の多くは諸仏来迎タイプのもの（葬式宗教）であるが、日常生活に密着したものもわずかに見られる。心理学はまだ宗教に代わるようなパワーは持っていないが（将来も持つことはありえないが）、ぐるぐると人間性の核の周囲をまわっていることだけは事実である。ある宗教に凝っている人は、あるいは入信している人は、安心立命^{あんじりつめい}の境地に立つことはできるが、自己を発見することは不可能である。それは自分を相手（宗教）にまかせてしまうからにほかならない。呑み込まれてしまうのである。

心理学は宗教と違って大勢の人びとをマスとして動かすことはできないが、個人個人に自己^{みづかみ}なるものを発見させるアドバイスをすることはできる。特に、性格心理学や臨床心理学は、精神分析学や精神病理学とともに戦後大いに伸び続け、すでに約五十年経過してもその力は弱

まっていない。人氣が衰えないのである。

心理学は「不安の落し子」かもしれないが、それよりもっと広く「人間性のキーワードを持つ科学」なのである。ただ、心理学者の中には、「人間のモデル化」に力を尽くしている人たち（法則定立的な立場をとる学者）と、「単一な個人」の再適応に意欲を持っている人たち（個人理解的な立場をとる学者）がいる。前者は理論派、後者は臨床派であるが、ともに自己発見に悩んだ人に味があるように思う。精神医学の建設者クレペリンは、なんらかの精神的動揺を持っている人のほうが、持っていない人よりもよい精神科医になれる——といっているが、これは心理学者にも当てはまることなのである。

偽科学としての「血液型性格学」

理論的な面で思索していようが、臨床的な面で行動していようが、心理学者は科学者である。科学の科の字は測定するということで、科学の本質は測定^{そくじやう}の学なのである。人間は自然を測定し、食物を獲得するための努力をかさねた。そして暦を作りあげたのである。自然科学は

そこに発芽している。次は人間科学の誕生である。人間も自然の一部分なのであるが、その不規則性（個性といいたほうがいいかもしれない）のために別格にされている。心理学はギリシア時代にこの人間科学として発展してきたが、だんだん人間的なものから遊離し、知覚・思考・認知……などというアカデミックなもの（基礎的なもの）にフォーカスを奪われてしまっている。性格研究が垂流になったのである。心理学界の片隅に押しやられているといってもよい。しかも科学者は謙虚である。でかいことはいわないし、はったりもしない。ひたすら人間とはなにか——を追求している。もちろん、臨床家は人間とはなにかということよりも個人とはなにか——を追求している。よく臨床家には変人や病人もどきの人が多いとか、我が強い人が目立つとか、自分だけの城に閉じこもる人ばかりだとか批判されているが、そういう逸脱した人はごく少数の異端にすぎない。どこにでもごくわずかなおかしい人はいるものである。優れた臨床家は、優れた理論家と同じように臆病に似た謙虚さを持っている。心理学の最もオーソドックスな「性格」の領域は、この臆病に似た謙虚さのために容易に他者の侵入を許して

しまう——ことになるのである。せっかく「自己発見の心理学」を念頭において勉強している日本の心理学者たちは、ある侵入者たちによって、その影を薄められてしまったといえよう。その代表が、古川竹二（東京女子高等師範学校——現在のお茶の水女子大学——教授）の「血液型気質相関説」のコピストだった能見正比古の「血液型性格学」である。能見はこのシステムに対して、カントばりの「血液型人間学」というすばらしい名前を付けて、マスコミに乗りに乗っていった。古川が「血液型気質相関説」という学説を唱えはじめたときのマスコミと、能見が「血液型人間学」をオープンにしたときのマスコミでは、比較にならない。膨大なパワーを持ったマスコミに乗った能見は、心理学はインチキだと厳しく批判している。心理学者に男女の相性のことを尋ねても応えてくれない。特定の男女の相性についてはわからない。ある男性の性格がどうであり、ある女性の性格がこうである——ということはいえるかもしれないが、結婚生活の機微についてはことばがない。しかし、血液型性格学はABO式のわずかに四種類の血液型（あるいは両親の血液型を考慮した二十四類型）でピシッと決めてしま

う。「臆病に似た謙虚さ」に対する「自信に似た傲慢さ」である。

血液型性格学は心理学よりも人気がある。わたくしは血液型性格学は偽科学であるという立場をとっているが、それこそおかしい、といって引き下がらない人たちがかなり多い。心理学者の中にも「だが、しかし」と半信半疑の人もいるから驚きである。

わたくしは、ある女子短大で心理学の講義をしているとき、機会をとらえては、実例をあげて血液型性格学の虚構性について話をしている。そして、学年末に彼女たちがどう変わったかを調べてみたが、わたくしの熱心な説明があっても「まだそれを信じている」女子学生が二六一人中一六八人（六四・四％）も見出されているのである。血液型性格学の知識は、すでに日本文化の中に染み込んでしまっているといえよう。もうそこでは「自己発見の心理学」は必要ない。

JRラインの自己発見

フロイトのリアリズムに対するユングのロマンチズム

ムのゆたかさについてはすでに触れているが、ユングからさらにロロ・メイ（R）とロジャーズ（R）につながるJRラインのことも忘れられない。このあたりは自己発見のロマンチック街道であり、自己発見のJRラインということができよう。

ユングはフロイトがあげた無意識を個人的無意識と名づけ、その下に人類共通の普遍的無意識（集合的無意識と訳すこともある）があることを明らかにしている。人間は、個人的な無意識を通して自分の過去と話をし、さらに普遍的無意識を通して縄文人や万葉人と同じ心性を持っていることが確かめられる、なんというすばらしいことであろう。

ロロ・メイの思想はフロムのそれと共通しているところがある。彼の思想の原点は、産業革命以後の経済的發展で促進された競争的傾向によって苛まれた人間に対する愛情である。競争的な努力は人間間の敵意を強め、孤独感を生み、その孤独感から生じた不安から逃れるために不断の競争的努力を重ねる、そういった悪循環にのたうちまわるか弱い人間に対する愛情である。わたくしはかつてホノルルの海岸でロロ・メイのベトナム戦争反対

論を聴いたことがある。真珠湾を出航した大型空母の艦影を背にして演説している彼の姿は、競争的世界における自己発見の困難性と必要性の象徴のように思われた。

ロジャーズは自己発見の心理学では一番徹底しているように思う。わたくしはどちらかというと理論派で臨床には無縁の徒であるが、日本にロジャーリアンが多いのに驚いている。彼は、人間は「本当の自分」と「自分でそう思い込んでいる自分」の二つの自分を持っているという。そして、前者をオーガニズム（生活体・有機体）、後者を自己概念と呼んでいる。この「自己概念」はその個人の生活史を通して形成されたものである。自分で思い込んでいる自分、といってもいいであろう。ロジャーズは「本当の自分（オーガニズム）の声を聴け」を強調する。この「本当の自分」は、あの「不思議な眼鏡」に現われたような恐ろしいものではないようだが、多くの人びとは「自己概念」のほうを大切に思うように思う。自分の生活史の中で一生懸命育ててきたものだからである。もしかすると、あのドロドロした恐ろしいものはこの「自己概念」のほうなのかもしれない。

ユング、ロロ・メイ、ロジャーズのJ Rラインは、日

本の学者ばかりでなく、ヤングの人びとも好まれている。日本人の心性に触れるところがあるからだと思う。特に禅の思想と近接しているように思われる。アメリカ人の中にも多くの禅ファンがいるようだが、ゼンとゼンガクレンとは関係があるのか——というような質問をする人がいてびっくりしたことがある。「座り込むところが似ている」と冗談をいったらうなずいたには驚かされた。日本人はわりあい西洋文化をよく理解するが、西洋人の日本文化についての理解度は怪しいものである。

自己発見のための修行

血液型性格学などという偽科学の虜囚にならないで自己を発見するにはどうしたらいいだろうか。すなわち、自己発見のために修行をするためにはどうしたらいいのだろうか。それは偉い人の話を聴くことと良い本を読むことである。ここで偉いとか、良いとかいう規準をはっきりさせることは非常にむずかしいが、社会的地位が高いとか、ベストセラーであるとかでないことは確かなようである。わたくしは専門が心理学なので、そういう領

域の本を読むことをすすめるが、優れた作家の著作を読みまくることも必要である。自分の専門領域の本しか読まない人がいるが、幅の狭い人になり下がっていて本当にかわいいものである。

しかし、本に読まれてしまうのは困る。有名な宮本武蔵は養子の伊織に剣をあまり教えなかったといわれている。ただ、池の端のちよつと高いところに立って跳躍し、空中で抜刀して水面に映った自分を斬ってみる——と命じたそうである。伊織はなんども池に落ち冷たい思いをした。——が、ついに空中で抜刀して水面の自分を斬ることに成功した。伊織は養父に自慢げにそのことを話した。そのとき武蔵はただ「お前はその瞬間、水面のお前によって斬られているのだぞ」といったと伝えられている。伊織はそこで剣の極意をつかんだ——というが、わたくしにはよくわからない。ただ、水面の自分によって斬られていることは事実である。二つのものは水面で対称しているから……。心理学、精神分析学、精神病理学の本を読む人は、自分が斬られないようにすることが大切だと思う。自己を発見しようとする勉強が、かえって自分を失わせるような勉強につながっては困るのである。

人間の心理的領域に関することに興味を持っている人は、他の領域に関心がある人よりもナーバスな人が多い。その敏感さをうまく生かすようにすれば自分が斬られないで、自己を発見することができると思う。アメリカの精神科医ビッシュも、自分の敏感さを矯正しようとしなくて、むしろよろこぶことが大切だといっている。自己発見の味はそこからしみ出てくるからであらう。

藍という色は実に深遠な美しい色であるが、それを染め上げる藍つぼの中の原液は決して美しいとはいえない代物である。しかし、そこから出された布は、なん回かの水洗いを経て、その美しさを現わしてくる。これは藍と愛とをかけことばにして結婚披露のときのあいさつによく使われる。わたくしも好んで数回使ったことを覚えている。これも自己発見に連なることかもしれない。

わたくしは「精神分析学」という学問に熱い眼差しまなを持っている一人である。あのようなものに学の字を付けるのはおかしいとか、エッチなことばかりいうとか鋭い批判があるが、それらは管見かんけん的なものといえる。フロイトやユングは「ミクロの決死圏」にも等しいこころの深

奥に沈んで自己を求めている。アメリカで発達した新しい精神分析学は家庭における親子関係から自由競争的な社会にいたる広汎な領域で自己を探している。人間の自己発見についての真摯なアプローチは、あの悪名高いナチの強制収容所における人間行動を通しての自己追求（深層心理学から高層心理学への発展）にも連なっているのである。すべての学問体系はその学者の自己弁護の体系である——と軽蔑しないで自主的に考究してほしいと思っている。

現代は「粹のない時代」である。個性ゆたかな生き方が許容されている。しかし、このままで済むだろうか。杞憂（きゆう）という人がいるかもしれないが、わたくしはそれを心配している。うっかりすると「与えられた自己」を背負わなければならない時代がくるかもしれない。

文献リスト

■ 性格を知る…オリエンテーション

乾 孝ほか『人格心理学』新読書社

オールポート『パーソナリティ』新曜社

片口安史『性格のはなし』誠信書房

シュルツ『健康な人格』川島書店

龍本孝雄ほか編著『性格の心理』福村出版

詫摩武俊ほか『性格心理学への招待』サイエンス社

詫摩武俊編著『性格の心理（第二版）』誠信書房

詫摩武俊監修『パッケージ・性格の心理』（全六巻）

ブレーン出版

長嶋貞夫監修『性格心理学ハンドブック』金子書房

中西信男・鏑幹八郎編『心理学10 自我・自己』有斐閣

閣

藤永保『思想と人格』筑摩書房

別冊宝島『性格の本』JICC出版局

間宮武『性差心理学』金子書房

宮城音弥『性格』岩波新書

宮城音弥・津島祐子『何が性格を作るか』朝日出版社

本明寛ほか編『性格心理学新講座』（全六巻）金子書房

房

ロッターほか『パーソナリティの心理学』新曜社

■ 自己を知るためのアセスメントメソッド

伊藤隆二・松原達哉編著『新訂・増補心理テスト法入門』日本文化科学社

大村政男『血液型と性格』福村出版

大村政男ほか『新訂・心理検査の理論と実際』駿河台出版社

岡堂哲雄編『心理検査学』垣内出版

塩見邦雄ほか編『心理検査・測定ガイドブック』ナカ

ニシヤ出版

本明寛・大村政男編『現代の心理臨床』福村出版

■ 自己発見のためのセオリー

秋山さと子『ユングの精神分析』講談社現代新書

アドラー『人生の意味の心理学』春秋社

ウィルソン『死後体験』未来社

上田吉一『自己実現の心理』誠信書房

エリクソン『自我同一性』誠信書房

エリクソン『幼児期と社会』（全二巻）みすず書房

小此木啓吾・河合隼雄『フロイトとユング』思索社

梶田叡一『自己意識の心理学（第二版）』東京大学出

版会

グーチ『夢魔』未来社

ジョーンス『フロイトの生涯』紀伊國屋書店

セシュエー『分裂病少女の手記』みすず書房

中村延江『女性のセルフフィットネス』誠信書房

林道義『無意識の人間学』紀伊國屋書店

A・フロイト『自我と防衛』誠信書房

フロム『愛するということ』紀伊國屋書店

フロム『自由からの逃走』東京創元社

マスロー『完全なる人間』誠信書房

マスロー『創造的人間』誠信書房

宮城音弥『精神分析入門』岩波新書

メイ『失われし自我をもとめて』誠信書房

ユング『分析心理学』みすず書房

ユング『ユング自伝』（全二巻）みすず書房

ユング『人間と象徴』（上・下）河出書房新社

レイン『自己と他者』みすず書房

レイン『引き裂かれた自己』みすず書房

ローウイン『からだと性格』創元社

ロジャーズ『人間の潜在力』創元社

■自己を知るためのセラピーテクニク

アサジョーリ『意志のはたらき』誠信書房

池見西次郎・杉田峰康『セルフ・コントロール』創元社

河合隼雄ほか編『臨床心理学大系』（全十六巻）金子

書房

ジェイムス『自己実現への道』社会思想社

ジェイムス『突破への道』社会思想社

ジェンドリン『フォーカシング』福村出版

杉田峰康『人生ドラマの自己分析』創元社

成瀬悟策『自己コントロール』講談社現代新書

ブルックス『センサリー・アウェアネス』誠信書房

ポリセンコ『からだに聞いてこころを調える』誠信書

房

ホルネイ『自己分析』誠信書房

三木善彦『内観療法入門』創元社

ユング『心理療法論』みすず書房

ロジャーズ『サイコセラピー』岩崎学術出版社

■自己発見のためのガイドブック

石井完一郎『自立のすすめ』弘文堂

石田春夫『自己不安の構造』講談社現代新書

稲村博ほか編『眠らぬダイヤル——いのちの電話』新

曜社

大平健『豊かさの精神病理』岩波新書

小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』中公文庫

オリアリー『エニアグラム入門』春秋社

神谷美恵子『こころの旅』日本評論社

神谷美恵子『こころの旅』（神谷美恵子著作集3）み

ず書房

河合隼雄『日本人とアイデンティティ』創元社

河合隼雄『宗教と科学の接点』岩波書店

国分康孝『〈自己発見〉の心理学』講談社現代新書

国分康孝『〈自立〉の心理学』講談社現代新書

霜山徳爾『素足の心理療法』みすず書房

ジャーシルド『自己をみつめる』創元社

白石浩一『役に立つ性格学』社会思想社

鈴木秀子監修『自分探しの本』春秋社

デュセイ『エゴグラム』創元社

未來社

起源と根源

カフカベンヤミンハイデガー

小林康夫著 2800円

現代的知の最先端からカフカベンヤミン、ハイデガーの一九三五、六年の作品を明快に分析した問題提起の書

ベルリン地下組織

反ナチ地下抵抗運動の記録

R・A・フリードリヒ／若槻敬佐訳 3000円

一九三八年から四五年までのドイツにおいて、ユダヤ人や祖国のために戦い続けた人々の勇気ある抵抗の記録

中世の国家と教会

ヴェルナー／瀬原義生訳

（カノッサからウルムスヘ一〇七七〜一二二二）叙任権闘争、第一回十字軍を総合的に捉えた中世史の労作

ジェームス三木戯曲集

安楽兵舎V.S.O.P.

「翼をください」「善人の条件」など話題作4篇。1800円

結婚という冒険 1500円

■1991年度版総合図書目録進呈
*表示価格は消費税別

東京都文京区小石川3-7-2
電話(3814)5521振東7-87385

土居健郎『「甘え」の構造』弘文堂

東郷豊治『性格の見わけ方』創元社

中西信男・佐方哲彦『ナルシズム時代の人間学』福村出版

出版

馬場謙一ほか編『日本人の深層分析』（全十二巻）有

斐閣

平井富雄『ストレスと自己コントロール』講談社学術

文庫

福島章『青年期のカルテ』新曜社

フロムほか『禅と精神分析』東京創元社

安本美典『集中力をたかめる』福村出版

頼藤和寛『性格をつかむ』創元社

大村政男（おおむら・まさお）

一九二五年東京生まれ。日本大学文理学部教授。文学博士。性格心理学専攻。主著に『異常性の世界』（きょううせい）、『血液型と性格』（福村出版）、『新訂心理検査の理論と実務』（共著、駿河台出版社）、『現代の心理臨床』（共編、福村出版）ほか。

東欧・ドイツの書店を見て

朝日新聞社会学部記者

上丸 洋一

彼のことを「本屋」と呼んでいいものかどうか、ちょっと迷う。たしかに彼は本を商品として売っていた。それは事実なのだけれど……。

東西ドイツの統一が成って最初の日曜日にあたる昨年（一九九〇年）十月七日、ベルリンはおだやかな晴天だった。その青年に出会ったのは、かつての東西ベルリンの「関所」、いまでは「観光名所」の一つとなっているチャー

リー検門所跡。壁のかけらやソ連兵の軍服などを売る露店の土産物屋から少し離れて、彼は道端にシートのような布を敷き、そのうえに三十冊ほどの本を並べて黙って客を待っていた。

『子どものためマルクス・レーニン主義』、『マルクス・レーニンの社会主義用語辞典』、『カール・マルクス伝』、『ホーネッカーの『わが人生』、あの『共産党宣言』。そし

て、大学の必修科目の教科書だったという『資本主義と社会主義の政治経済学』、『マルクス哲学』、『SED（社会主義統一党＝共産党）の歴史』。

「売れ行きはどう？」

「まあまあだね。観光客がお土産に買っていくんだ」

本の入手先をたずねると、最初、彼は「自分の本だ」といつていた。ところが、話がすすむうち、「大学の図書館が廃棄処分になっていたのを無断で持ってきた」と打ち明けた。

「社会主義？ うんざりだね」

ドレスデン（旧東独）の大学の工学部に学ぶという二十六歳、名前は教えてくれなかった。

昨年秋、フランクフルト・ブックフェア日本年の取材でドイツを訪ねた。せっかくの機会だからと思い、チェコスロバキアとポーランドにも回って、自由化後の出版事情を取材した。あわせて三週間の旅だった。

その取材の結果は昨年十一月十九日から二十九日の間、朝日新聞文化面に「自由化のなかで——ドイツ・東欧の出版事情」と題して六回にわたって連載した。ここでは、

その連載となるべく重ならないよう、各国の書店事情を中心に書いてみることにする。

チェコの首都プラハ。自由化以前、この国では新刊の発売は木曜午後四時からと決まっていた。外国のベストセラー小説の翻訳などが出るときには、書店の前に百メートルもの行列ができることもあったという。本もまた計画生産、よく売れるからといって増刷されることはほとんどなかった。だから発売時に入手しておかないと、二度と手に入らなくなるおそれがあった。今はもちろんそういうした制約はない。街頭で本を売る人の姿があちこちで見られた。

プラハの目抜き通りにある子どもの本の専門店・アルバトロス書店は、同名の児童書出版社の直営書店だ。同じ書店といっても日本のそれとは趣きが異なる。カウンターをはさんで客と店員が対面する形になっており、そのカウンターのの上に本のサンプルが面展示されている。店員が背にする書棚にもやはりサンプルが並んでいる。客はそのサンプルを見て本を選び、買うとなったら店員がカウンターの下から商品を取り出し、客に手渡す。

この方式だと万引きはまず不可能（もっとも、万引き

防止対策でこうした方法をとっているのかどうかかわからないが、本も汚れないですむ。このサンプル展示は、プラハだけでなくポーランドの書店でも見かけた。

アルバトロス書店では、本は、その対象年齢別にまとめて展示されていた。絵本などの質は非常に高いという印象。値段は日本円に換算すると百数十円といったところだが、賃金水準を勘案すれば、二千円ぐらいに相当するだろう。

経済の市場化の波はこの書店の中にも及んでいた。かつて本は定価販売（それは社会主義経済下の一つの物価統制策によるものであって、日本のような資本主義下の再販制にもとづく定価維持とは意味が違ふ）が守られていたが、いまでは売れ行きのわるい古い本は値下げして売っており、新刊書も時期を限って値引きセールをすることがあるとのこと。ただし、チェコの場合、のちに述べるポーランドと違って、定価は本にきちんと記載されていた。つまり値引きすることはあっても、よく売れるからといって値上げすることはない、というわけだ。

パツラフ広場に面したメンラントリッヒ書店は、売り場面積七、八十平方メートルほど、この国では規模の大

きい方だ。先のアルバトロス書店と違って、ここでは客がスーパーのかごのような入れ物をもって店内に入り、同じくスーパーのレジのようなところを通じて外に出る。

女性店長のブランカ・チーシコワさんに本の流通がどうなっているかを聞いてみた。それによると、本の生産・流通のかなめになっているのは、国营取次会社が発行する週刊の新聞情報紙。読者はこれを見て書店に本を注文し、書店はその「客注」と見込み注文分をあわせて取次に発注する。取次はその数字をまとめて出版社に連絡。出版社はそれによって発行部数を決定する。どの本を仕

入れるかは書店の自由。返品なしの買い切り制だ。

こうした基本的な仕組みは、自由化の前後であまり変化がないようだ。社会主義政権下、言論の自由が抑圧され、結局、作り手の都合・考えだけで本が作られていたことは当然大きな問題であったし、それ自体を肯定することはできないが、計画的に生産してムダが少ないという点では、それなりに合理的であったのかもしれない。

なお、本の仕入れはかつては国营の取次会社を通してしかできなかったが、今は新しくできたプライベート出版社の本など、直接仕入れることも可能。その場合、返品

することもある、とのことだった。

より急進的に改革をすすめるポーランドは混乱のさなかにあった。第一、国営の独占取次会社ですでに活動を停止しており、流通のパイプが失われてしまっていた。

第二に急激なインフレの影響だ。

プラハ以上に、ワルシャワでは「街頭書店」が目立っていた。学生のアルバイトのような感じの店も少なくないが、それよりも、ちゃんと商売として本を売っている文字通りの書店の方が多かったように思う。それも取次がなくなくなってしまったことと無関係ではない。出版社から直接仕入れて街頭で売るのが、これによって出版社も営業上、非常に助かっているのだという。また、そうした街頭書店の中から、ワルシャワで本を買って地方都市の業者に売るといふ一種の取次業者が現れてきた、とも聞いた。

街頭書店はもちろん、買い切りで本を仕入れる。面白かったのは、仕入れ価格に二〇%ほど上乗せして本を売っていることだった。日本の書店も、マージンはざつと二〇%。混乱のポーランドもやはりそのあたりで落ちているという、その偶然(?)の一致が興味深い。

そして、インフレ。入国直後、ワルシャワ空港での両

替でまず驚いた。五十万ズオチ、という札があったからだ。日本円に換算すると八千円ぐらいだろうか。この数字の大きさがポーランドのインフレの激しさを何より雄弁に語っていた。現地在住の通訳の人も、その札を見るのは初めてだと話していた。

この激しいインフレのために、ポーランドの本には価格の表示がない。以前はあったのだが、紙代も印刷代もみるみる値上がりしていく中で、表示できなくなったのだ。そのせいでたいへんに困っているという話を出版社の経営者に聞いた。「私としては安い値段でたくさん売ってほしいのだが、本屋は売れそうなお本だと見ると高い値段をつける。そして、その結果売れなくなる。小売価格をコントロールすることができないために、売れ行きの予測が立たない」。

仮に五万部売れると見込める本でも、流通機構がないので二万部しか作れない。一方、時間をかければ売れるという本もあるが、それだとインフレで資金繰りが苦しい。読者、とくに学生・インテリの購買力が落ちていく……。

私が取材した昨年の秋の時点では、インフレはかなり沈

静化していた。それでも、その影響は強く残っていた。

帰国後、私はポーランドの出版点数が激減しているという新聞記事を読んだ。ちなみに、ポーランド南部の古都クラクフで何軒かの書店Ⅱそれは対面方式の書店だったⅡをのぞき、本の点数を数えてみたが、どこも二百点程度だった。確かに日本の書店とくらべてみれば貧弱。読者のニーズをどこまで満たしているのか疑問だったが、見方を変えれば、それでも書店は成り立っているのであり、現にどの書店にも客はたくさんいた。出版点数が多ければ書店がもうかるというものではなく、少なければ少ないで、やっぱり読者はいるのではないか、あるいは、点数の多いことがかえって読者を本から遠ざける方向に作用することはないだろうか、などと、日本にひき比べながら思ったものである。点数の激減が、本の定価販売ができなくなったことと直接関係があるのかどうかかわからないが、再販制への「圧力」が強まる中、日本の出版界が研究すべき課題であるかもしれない。

旧東ベルリンで乗った電車に、「面白くてためになる社会主義の国々からの新聞・雑誌」という郵便局の小さな広告シールが貼ってあった。だれかが落書きしたのだ

ろうか、「社会主義の国々からの」の部分が横線で消されていた。

通訳をお願いしたドイツ文学翻訳家の若林ひとみさんによると、旧東ベルリンの書店の品ぞろえは、かつてと全く様変わりしたとのことだった。ハバをきかせているのは西ドイツ側の出版社の大衆娯楽小説。ブランドンブルグ門近くの総合書店の哲学の棚をのぞいてみると、以前はマルクス・エンゲルスの全集がずらりと並んでいたというそこに、社会主義哲学の本は、マル・エン全集のうちの二点と「マル・エン研究年報」が二冊あるだけだった。かわって平積み、どころか床積みになっていたのが節税対策の本。タイトルを直訳すると——『一〇〇〇の合法的な税金トリック——所得税を払いすぎていると思うみなさまに』。壁がとりはらわれた時のあの興奮はすでになく、人々は日々の暮らしへの不安を強めていた。

——こうして旧西独を含む三つの国をかけ足で回ったのだが、強調しておきたいのは、どこの国においても、「書店」とはすなわち「書籍店」であり、雑誌スタンドとは画然と区別されていることだ。

例えば人口六千百万の旧西独の書店数は約三千八百軒。

人口のちがいを考慮にいれても、二万数千軒といわれる日本と比べて、はるかに少ない。それも要するに書籍店であるからだ。逆にいうと、日本の書店が書籍だけで商売をするとなると、生き残るのは限られた書店だけということにもなるだろう。読者にとってどちらがいいか、にわかには判断できないが、書籍と雑誌の混在がさまざまな矛盾を招いている日本の出版・書店業の現状をみるにつけて、考えさせられる事実だった。

社会全体の変動の一端を、東欧・ドイツの書店の店頭にみた。同時に、そこで感じたのは、これらの国の文化の厚みでもあった。それは過去にいくども「革命」をくりぬけてきた歴史の重みといえるかもしれない。変わ

るものと変わらないものの、経済環境の激変をこえて貫かれる文化の伝統の力——。街頭にはボルノ雑誌や軽い小説類を売る露店が並ぶワルシャワの中心部、文化科学宮殿の中にある大きな学術書専門書店が客でいっぱいであったことを忘れることができない。

（昨秋の海外取材にあたってはたくさんの方々にお世話になった。とくに、本文中にも記した若林ひとみさんには、渡欧以前からさまざまな情報を収集していただいた。新聞紙上で謝意をお伝えできなかったので、本誌上を借りてお礼申しあげる。また、この拙い報告を掲載していただいた人文会にも感謝の意を表したい。）

動き出した「出版VAN」

「新文化」記者

村上信明

出版社、取次会社、書店のコンピュータ同士を通信回線で結び、出版社の在庫情報や取次・書店の注文品受発注情報などのデータをやりとりするオンラインネットワーク「出版業界VAN」（以下「出版VAN」）構想が業界各方面の関心を集め、論議を呼んでいる。

「出版VAN」構想は、講談社が提案し、他の大手・中堅出版社一五社が賛同して実現へ向けての準備が進められてきた。これまでの経過を簡略に記そう。

▽八九年秋、講談社に対し東販、日販が別個にデータ交換のためのオンライン化を要望。講談社は、取次各社

と個別に対応できないので一元化に向けて取次同士で話し合ってもらいたいと回答。

▽九〇年六月、講談社と取次四社（東販、日販、大阪屋、栗田）がNTTデータ通信の「ツインネット」によるオンラインデータ交換システムの検討を開始（「ツインネット」が選ばれたのは、将来の拡張性、機能の多様性に優れ、「図書カード」の決済処理も同ネットが使用されることに決まり、一元化しやすいため）。同システムによる実施要領は十月にまとまる。

▽九〇年十一月、講談社が他の大手・中堅出版社に呼び

かけ、「ツインネット」の説明会を開く（二五社参加）。

▽右の活動と併行して出版社四社（講談社、小学館、新潮社、徳間書店）と取次四社は「出版VAN」運営協議会会則案の研究を進める。

▽九一年一月、大手・中堅出版社一六社の営業、管理部門の実務担当者による「出版VAN」出版社連絡会準備委員会が発足。出版社連絡会発起人一三氏（各社役員、部長クラス）を選出。

▽九一年二月、同準備委員会が「出版VAN」の出版社説明会を開催（二三〇社四五〇人参加）。「出版VAN」運営協議会会則案を配布。三月の第二回同説明会（二一九社五二〇人参加）では化粧品・日用雑貨業界VAN運営会社「プラネット」の玉生弘昌専務が業界VANについて講演。

▽九一年四月、講談社が「ツインネット」を使って取次四社に在庫情報のオンライン送信を開始。日販は同在庫情報を「NOCSS」に転送。「ツインネット」を使っただけの出版社の在庫情報提供は、準備の整った社から順次開始され、今年中に一六社が予定されている。

「出版社VAN」構想は、いま端緒についたばかりだ。

一冊の本にたとえるなら「はじめに」のところで、「目次」のような具体的な内容もまだはつきり見えない。同準備委員会がまとめた出版社説明会のアンケートによると、参加者から次のような意見が寄せられている。

「漠然としていて具体性が乏しい」「VAN構築のスケジュールを明確にして欲しい」「VANと物流の関係が不明確」「VAN会社（NTTデータ通信）とVAN運営会社（または業界三者による協同組合）との関係を詳しく知りたい」「日書連のBIRDNETとの関係は？」「取次の出版VAN構想をどう考えているのか。とくに企業間競争の道具として自社VANを構築してきた大手取次の考えを知りたい」etc.

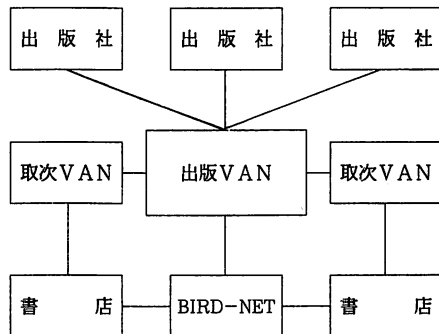
「出版VAN」運営協議会が設立されておらず、まだ有志による準備委の段階という枠があって一線を超える説明を当事者は避けてきたようだ。そのためアンケートにあるような意見や疑問は出るべくして出たものといえる。第一回の出版社説明会で準備委は、業界の意志統一をはかるため「助走期間を長くとりたい」と述べていたが、「説明が不十分」の声が沸いてきたからには、具体的な

計画と内容および大手取次との折衝経過などを詳しく説明すべきだろう。その方が余分な助走期間をとらなくて済む。

実際のところ、書店側にすれば助走期間を余り長くともらつては困るという事情がある。一元化した「出版VAN」の構築をいまかいまかと待ち望んでいるのは書店側である。

現在、取次系VANの「TONEETS」「NOCs」「OPAS」「KINS」と日書連系VANの「BIRD-NET」を合わせると、書店に導入されている各種オンライン端末機器は四〇〇〇台を越えている。これを書店数で見ると、少なくとも二五〇〇店は何らかのオンライン端末を導入している。人文会特約店クラスの書店は、ほとんどがオンライン端末設置店である。

これらオンライン端末導入店にとって現状は、端末で出版社在庫を確認できない、注文品を取次へオンライン発注しても取次在庫のないものが出版社へ転送できない、本・支店で「TONEETS」「NOCs」を個別に導入したが互換性がないため自店ネットワークシステムが組みえないなどの不満がある。「出版VAN」の構築を書店



出版業界VANの予想図

側が強く期待するのは、こうした不満が解消されるばかりか、オンラインによる出版社への直接発注とPOSデータの速やかな提供（売上スリップの仕分け・送付は不要が可能となり、さらに複数帳合の場合はオンライン発注品を入荷の早い取次へ納品するよう出版社に指示することも可能になるからだ。

こうした出版社・書店間の注文情報の直接的やりとりを、自社VANを構築してきた大手取次は警戒する。水

平型VANの業界VANが構築されると、相対的に問屋の力が弱まると他業界ではいわれている。シェア争いの武器として、書店系列化の道具として垂直型の自社VANを使っている大手取次にとっては一大事だ。よって自社VANと「出版VAN」の接続はOKだが、「BIRD-NEET」や有力書店チェーンのコンピュータと「出版VAN」の接続は絶対NOという取次幹部もいる。

大手取次の参加がないと情報インフラストラクチャー（業界基盤）としての「出版VAN」構築の見通しは立たない。かといって「BIRD-NEET」との接続を断つわけにはいかないので、大手取次の軟化を待つほかはない。準備委の「説明不足」の大きな理由は、そんな事情からきている。

「出版VAN」構想のすっきりした青写真はいまのところ示されていない。というよりも設計段階にあるものを中途半端なままで見せて誤解を招きたくないというのが正直なところだろう。それでも青写真の核心部分は垣間見ることはできる。一例としてあげられるのは、講談社書籍販売企画部が「DC・POS」協力書店向けに出し

ている「まるこメイト」四号（三月発行）に載った「版元四社陽春大放談」と題した座談会だ。

座談会出席者は、講談社、集英社、新潮社、文藝春秋の営業現場責任者クラスの四名。いずれも「出版VAN」の出版社連絡会準備委員会のメンバーである。「大放談」であるだけに、ここでは思い切った発言をしている。

「共通の問題を話し合い、大きな構想でその解決策を探る動きは、おそらく（業界の）エライ人たちの立場ではできない。現場で苦労している我々レベルだからこそできる」

「（実務者レベルの）新しい動きは、消費税がああいう形で決まり、しわ寄せが現場に来たことがきっかけになった」

「業界でよくいう『三位一体』は曲者の言葉で、どこか曖昧にしておこうという響きがある。それぞれ独立している業界三者がどうやってお互いを結びつけるかという『三位連帯』くらいの気持ちの切り替えが必要な時代がやってきた」

「取次が量を増やしているうちに量に巻かれてニッチもサッチもいかなかったのは失策だと思う。業界VAN

構想について書店と出版社が直でやるかもしれないから困るというが、要するに量が減るからだろう。では、客注品は一冊一冊手がかかってしょうがないからできれば外したいというのと、どっちが本音なんだ」

「取次としてのデイストロビューション部門と営業部門を分けてくれると、競争のありようも今と別の形になる」

「取次のデータベースはメンテナンスができていない。

七〇万点入っていても流通していないものが二〇万点あり、VANの価値はあまり出ていない」

「(VANによって)在庫の確認がしやすくなれば注文の取扱いがスムーズにいく。まず版元が情報を流す場をつくるから、そこへアクセスする方はどうぞという形の方が読者や書店のことを考えた一番シンプルで妥当だ」

「(VANは)将来、物流を考えた上での受発注業務の簡素化に向かう」

「文庫のバーコードは三年ぐらいで行きわたる。(文庫出版社の)共同返品処理センター構想も今から考え始め

ないと」

「出版社の倉庫も数社、あるいは数十社を取り込んでゆく将来的な展望を持つべきだ」

「出版VAN」構想が、各社の実務者レベルの話し合いから始まり、まず取次への在庫情報の提供をとっかかりとして、次いで注文品のオンライン受発注に活用し、将来は出版社共同倉庫まで展望していることが、大放談で明かされている。業界のエライ人や大手取次には気に入らない放言もあるだろうが、これを読んだ書店(DC・POS店は約四三〇軒)には大いに気に入られたようだ。

水平型業界VANの先駆者である「プラネット」の玉生弘昌専務は、自分の著書で「まだ期が熟していない業界では、業界全体でVANはやらないことにするのが一番の得策」と述べているが、「出版VAN」の場合は出版社側および取次側よりも、書店側の方に強いニーズがある。

(五月一日記)

91年度委員会活動について

販売企画委員会

委員長 重光 義彦

「人文書の販売はむづかしい」。よく聞く言葉であり、よく口にする言葉でもあります。確かにその通りですが、

「むづかしい」から売れなくても仕方がないはずもなく、ましてやその出版活動で社会の啓蒙に貢献することを自

負するからには「すぐれた人文科学書の普及・販売を積極的に推進」しなければなりません。

そうは言っても人文書の幅の広さは目録の刊行にしても最初「歴史」が分かれ、その後も三冊の分冊にしなければ収まりきらないほどこです。当然、書店店頭においてもこの膨大な量の刊行物は置ききれません。というより棚を交通整理出来ません。

そのような状況の中で考え出されたアイディア「特選人文図書セット」——現在は取次とタイアップして毎年送品している「人文基本図書セット」こそ当委員会の最も重要な仕事であると考えます。

このセットをただ恒例だからというだけで継続するだけでなく、真剣に検討を加え、充実した棚作りを目標に努力いたします。

基本図書への取り組みだけでなく、過去にもなされてきたように様々な販売企画にも積極的に取り組んで行きたいと考えます。

「世紀末」といわれ、国内をみても世界をみても誰もが信じて疑うこともなかった古い秩序が音をたてて崩壊しています。毎日どこかで何かが消え、新しいものが生ま

れています。これまでは何処かに集約された小さな意見もさまざまな主張として登場します。このような時代からこそ人文書は必要だし、それだけに通り一遍でない木目細かい販売活動が求められるでしょう。当委員会はこれを充分に認識して活動します。

時代というところで考えると、「情報の時代」それも「情報過多の時代」と言われます。販売活動においては、最も重要な情報の「蒐集」・「整理」・「加工」・「発信」に問題はなかったか。ともすれば、コミュニケーションの不足が販売活動に支障をきたしていた例は数えきれません。

実際の販売活動において、情報の行き違いによる折角のビジネスチャンスを逸することのないよう充分に配慮して活動します。

最後に、実際の販売に直接携わっていただく書店・次店の皆様には今後とも忌憚のないご意見やご提案をいただきまして、「すぐれた人文科学書の普及・販売を推進する」当委員会の活動にご助力を賜りますよう、お願い申し上げます。

弘報委員会

委員長 土屋知可夫

当委員会では、三つの媒体をもっていますので、まずその概要について説明いたします。

* * *

「人文会ニュース」は、年四回ないし三回発行いたしております。情報誌の側面と機関誌の側面とのバランスをとりつつ、最初から最後まで読まれるよう努力いたしております。特に、二三回を数える「人文書講座」は、今店頭で注目されているテーマを毎回取り上げ、そのテーマについて平易に解説するとともに百点以上の関連書を紹介しております。書店さんの販売促進のバック・アップの役割をはたしていることと思います。

発行部数は三千部、特約店・準特約店、図書館及び業界関係者にお送りいたしております。

* * *

「新刊月報」は、前月刊行された会員社の新刊リストであり、毎月、特約店・準特約店及び図書館にお送りいた

しております。スペースの都合上内容紹介等はありませんが、在庫チェックあるいは選書リストとして活用されていることと存じます。

発行部数は千五百部です。

* * *

六年余り続いた月刊「ワンポイント情報」（九一年一月号で終刊）の後継として「試読室」（年四回発行）を四月に第一号を発行いたしました。各社の新刊及び既刊情報媒体として、特約店・準特約店にお送りいたしております。

発行部数は八百部です。

* * *

当委員会は、これらの三つの媒体のさらなる充実と有効活用の方法を検討していきたいと思っております。読者の方々のご意見をお待ちしております。

調査・研修委員会

委員長 濱地 正憲

人文会は会則に「すぐれた人文科学書の普及と販売を積極的に推進する」とありますが、その手段として委員会制度があります。

去る五月十六日の第二十四回総会におきまして調査研修委員長に選出され、昨年に引き続き引き受けることになりました。委員としまして、これも昨年同様のメンバーで澤畑副委員長、渡辺・管田委員という構成です。

今年の活動計画（といいますと大袈裟ですが）いわゆるやりたいことですが、会の大きな活動の中の一つに特約書店様を訪問することがあります。今秋は愛知県を訪問する予定でおります。そのときの書店様との懇談会や研修会を準備するのが当委員会です。会員各社は専門書を出版する版元の集まりであり、一版元が単独で書店様を頻繁に訪問することがなかなか出来にくい状態のため、せめて団体で効率よく訪問したいものと考えております。それでも全国を訪問するとなると十年に一回の訪問とい

うサイクルになってしまいます。だんだん言い訳めいて参りましたが、とにかく人文書版元の集まりでも様々な分野を得意とする社があり、人がいます。有益な情報や意見の交換ができることを考えております。訪問の折は、宜しくお願い申し上げます。

前述の特約店訪問の間隙にありますのが関東近域の特約書店様との交流不足があります。いつでも訪問できるという気持があるためか、実は灯台もと暗しです。そこで日帰り圏内の書店様に一堂に集まっていたら、人文書の動向がわかるような講演会や研修会が出来ないものだろうか検討しております。ぜひ実現させたいものです。

最後になりましたが、業界全体を見えますと消費税はこのまま定着するのか、情報ネットワークとしての出版VANの導入、はたまた再販売価格維持制度の行方、など様々な動きがありそうです。これらの点も調査・研

究しつつ、かつ見据えながら、活動していきたいと考え

ております。

図書館委員会

委員長 萬洲 隆男

一般の人文会総会で、新たに図書館委員会が設置され、その委員長に任せられました。

まったくの新しい委員会ですので、ある意味ではやりがいがあり、また同時に、何から手掛けるか迷いもあります。

人文書という地味なジャンルから流通問題を考えるならば、大学図書館・公共図書館は大きなマーケットとして当然意識しなければなりません。

児童書の版元をはじめ、いろいろな版元が個々に、またはグループを組織して、学校図書館・公共・大学図書館に多額の費用をかけて巡回販売を行なっています。また、人文会では毎月の新刊案内を送付したり、「人文会ニュース」に定期的に図書館の方をはじめ、TRCの石

井社長にもご登場いただいたりしています。首都圏の大学図書館と随時行なっている話し合いの他に、毎年秋の研修旅行の際には、書店訪問だけではなく、その地の中央図書館さんとも研修会を行なってきました。

以上のように版元側からはかなり積極的に図書館に対する働きかけをしている面もあります。率直に言えば、版元のこうした投資に対する図書館からの反応は、肌を感じる程ではないようです。また一方、図書館側から見た版元の反応も、不満にみちたものではないでしょうか。例えば、品切本の増大、注文品が遅い、不必要でしかも豪華な箱等々……。

こうした図書館と版元のすれ違いは、なにも日本だけではないようで、欧米でもよく聞く話でもあります。

いずれにしても、今後の出版界の状況は、一方で「文化の時代」と言われながら、明るい材料が非常に少ないように思われます。

われわれ人文会の図書館委員会としては、頭でいろいろ推測するよりは、先ず大学・公共・学校の図書館と直に交流する機会を増やし、図書館、及び中小専門書出版社双方の実情、問題点を話し合う場を設けていきたいと

考えています。双方が協力することによって解決できる事があるでしょう。そういった地道な活動を通して、お互いが本心に頼れる関係が築けないかと思っています。

そのためにも図書館さん側から積極的な発言をお待ち致しております。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

弘報委員会より

○去る五月十六日、年次総会を開催し、九〇年度の活動報告と九一年度の新体制を決定いたしました。

総会は、会としての大きな節目ですので、迎える度に気持ちが高揚いたします。

○総会では、会長に相田良雄氏（みすず書房）を、代表幹事に菊池明郎氏（筑摩書房）を引き続き選出いたしました。

また、書記に須田康昭氏（平凡社）を、会計に平石修氏（御茶の水書房）を選出いたしました。

○各委員会の新委員長に今年度の活動予定を報告していただきました。

○「人文会ニュース」及び新しくスタートした「試読室」につきまして、ご意見、ご要望がございましたら、ぜひお知らせ下さい。

○最後になりましたが、今号にご執筆いただきました方々に、厚く御礼申し上げます。

○次号は、九月下旬刊行の予定です。お楽しみに。

人文会会員名簿

(〒111 台東区蔵前 2-6-4 筑摩書房内)

1991. 6 現在

	社 名	担当者	〒	所 在 地	電 話	FAX
幹 事	青 木 書 店	古川 清	162	新宿区早稲田鶴巻町 538	3202-3999	3204-1187
	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
	御茶の水書房	平石 修	113	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
	紀伊國屋書店出版部	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘 5-38-1	3439-0128	3439-3955
	勁 草 書 房	氏家 富男	112	文京区後楽 2-23-15	3814-6861	3814-6854
	社会思想社	渡辺 和彦	113	文京区本郷 3-25-13		
				中銀本郷 3 丁目ビル	3813-8105	3813-9061
幹 事	春 秋 社	澤畑 吉和	101	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
	晶 文 社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田 2-1-12	3255-4501	3255-4506
	誠 信 書 房	濱地 正憲	112	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
	創 元 社	重光 義彦	162	新宿区山吹町 334-11	3269-1051	3269-1092
代表幹事	筑 摩 書 房	菊池 明郎	111	台東区蔵前 2-6-4	5687-2680	5687-2685
	東京大学出版会	竹内 康一	113	文京区本郷 7-3-1		
				東京大学構内	3811-8814	3812-6958
幹 事	日 本 評 論 社	菅田 誠	170	豊島区南大塚 3-10-10	3987-8621	3987-8590
	福 村 出 版	土屋知可夫	112	文京区小石川 1-3-17	3813-3981	3818-2786
	平 凡 社	須田 康昭	102	千代田区三番町 5 K ビル	3265-0455	3263-9333
	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見 2-17-1		
				法政大学構内	3237-1731	3237-8899
会 長	み す ず 書 房	相田 良雄	113	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
	〃	持谷 寿夫	〃	〃	3814-0131	3818-6435
	未 来 社	西谷 能英	112	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
	雄 山 閣 出 版	武 一雄	102	千代田区富士見 2-6-9	3262-3231	3262-6938
	有 斐 閣	辻村 清隆	101	千代田区神田神保町 2-17	3265-6811	3262-8035
	吉 川 弘 文 館	阿部 昇	113	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

販売企画委員会 ◎重光 ○竹内 古川 氏家 武 阿部

弘 報 委 員 会 ◎土屋 ○原田 佐久間 西谷 辻村

調査・研修委員会 ◎濱地 ○澤畑 渡辺 菅田

図 書 館 委 員 会 ◎萬洲 ○持谷 市川

臨死体験

生と死の境界で人はなにを見るのか

グレイソン他編／笠原敏雄監訳
事実か幻覚か？報告の増加と共に
注目を呼ぶ臨死体験を各界の権威
があらゆる角度から討論。3200円

誕生を記憶する 子どもたち

D・チェンバレン／片山陽子訳
胎児も新生児も大人と同様の意識
をもっている／妊娠出産の常識
を覆す革命的研究の全貌。2400円

▶ 定価は消費税込み

東京都千代田区 春秋社 (03)3255-9611
外神田2-18-6 振替東京8-24861

橋爪大三郎

現代思想はいま何を 考えればよいのか

ポスト冷戦時代を切り拓く〈知的
言論〉の方向を示す。1957円＋税260

庄野 進

聴取の詩学

ケージから
ケージへ
偶然性を取り入れ〈聴くこと〉を
意味にしたケージ。2575円＋税260

K.フィッシャー／玉井・宮本訳
ヘーゲルの精神現象学
ヘーゲルII 代表的著作の明快な
解説。全6巻完結。2884円＋税310

小竹裕一

変貌するシンガポール

〈豊かな社会〉の実現のなかで 現
地発信、新鮮レポート。2884円＋税310

* 定価は税込／振替東京5-175253

東京文京 勁草書房 電話(03)
後楽2-23 3814-6861

強制収容所へ ようこそ

I・ラトゥシンスカヤ 矢田・片岡訳
私たちの国はどこでまちがってしまったのか？
ゴルバチョフ政権下で四年
間、「政治犯」として獄中生活を送った
女性詩人の回想録。3900円

ローマ歴史散歩

エリザベス・ボーエン 篠田綾子訳
永遠の都ローマ。さまざまな遺跡や光
景に触発され、2500年におよぶローマ
の街の物語が甦る。英国の代表的女流
作家による都市紀行の名品。2200円

晶文社 東京都千代田区外神田2-1-12
電話(3255)4501

冤罪の構図

江川紹子
四六・一八〇〇円

やつたのはおまえだ

ジョン・W・ゴフマン／今中哲一 塚谷恒雄他訳
ジェルノブイリ事故後、社会的関心の高まりの
なかで翻訳刊行のまたれていた名著。世界的に
も核時代の「バイブル」との高い評価を得ている。
■案内送呈 A5判七八四頁・二〇、〇〇〇円

人間と放射線

●医療用X線から原発まで

社会思想社

東京都文京区本郷3・Tel 03-3813-8101

●続々重版!●

日本の歴史を よみなおす

網野善彦

14世紀の出来事から新しい日本史像に
いどむスリリングな試み。いま話題の
本! (ちくまプリマーブックス50) 1100円

西洋中世の男と女

阿部謹也

聖性の呪縛の下で 中世のキリスト
教会はなぜ夫婦の性行為にまで厳しく
介入したのか。愛の社会史。 2270円

筑摩書房

〒111 台東区蔵前2-6-4
☎03(5687)2680 (定価は税込)

マリリン
ジュディー
アラン
セバーグ
アー
ヘミングウェイ
ヴァージニ
三島「
ジョー・
横
ケストラー
希典
ゲッペルス
顔

なぜ彼らは自殺したのか

布施豊正著 2200円

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6
TEL.03-3946-5666

英米法辞典

待望の本格的英米法辞典

小項目主義により一万三〇〇〇項目収録。英米法専攻者
—実定法研究者、弁護士から成る五二名の執筆者間の相互
校閲および編集委員会の徹底したクロス・レファレンスに
よって、正確で実践的な訳語と簡潔・明快な説明を実現。

東京大学出版会創立40周年記念出版
編集代表 田中英夫 菊判上製・箱入 / 一五四五〇円(税込)

▼5月10日
刊行

東京大学出版会

日本語の使い方



・話し方と書き方の常識
西田直敏・西田良子 日本語の文法・発音から
文章表現の基本までをわかり易く解説。常用漢
字表、人名用漢字等の付録つき。 2300円

英語で読む

アメリカのフェミニズム

松野潔子・藤枝渥子編 アメリカのウーマンリ
ブの原典22篇を選び、その流れをたどりつつ解
説を加える。英語テキスト。 1500円

創元社

大阪市北区西天満1-4-2
東京都新宿区山吹町334-11

エラノス叢書

第1期[全11巻・別巻1]

★最新刊/好評発売中——

8 言葉と語りⅠ

V. ツカーカンドル+E. ペンツ+A. ポルトマン/訳=芦津丈夫他 音楽と言葉が創られるトポス、声音遍満する世界の深奥に、音楽哲学、神秘思想史、形態学の三巨匠が測鉛を降ろす。

●定価2,575円(税込)

★既刊3冊——

1 時の現象学Ⅰ H.コルバン他=著

5 光・形態・色彩 A.ポルトマン他=著

10 創造の形態学Ⅰ K.ラインハルト他=著

●定価各3,090円(税込)

平凡社 〒102 東京都千代田区三番町5
振替・東京6-29639 ☎03-3265-0455

法政大学出版局

ヨーロッパの 日記 G・R・ホッケ

石丸昭二・柴田斎・信岡資生訳 ルネサンスから現代まで、赤裸な〈生〉の記録を、明確に抽出された基本モチーフによって分類分析し、ヨーロッパとヨーロッパ人の本質に迫る体系的日記人間学。税込九九九円

〒102 東京都千代田区富士見2-17-1
☎03-3237-1731 振替・東京6-95814

●ヨーロッパ文化の源を探る

古代ローマ物語 PART1

柴田光蔵/著

2400円

今日に至るまでヨーロッパのありように大きな影を落としているローマの法と文化を理解するために、古代ローマの文物・制度を、軽妙な筆致で紹介する。

分裂病を生きる

安斎三郎/編著

1800円

町中の診療所に通院する患者と家族・医師の三者による闘病生活の記録であり教えられることが多い。



日本評論社

豊島区南大塚3-10-10 ☎03-3987-8621

■好評発売中■

大村政男 著

四六判/定価一九〇〇円

血液型と性格

現代血液型性格学のルーツと仕掛けを徹底的に検討し、その偽科学性を証明。血液型ブームに警鐘を打ち鳴らす!

繁多 進他編

A5判/定価三〇〇〇円

社会性の発達心理学

新生児・乳幼児の対人関係能力の発達。過程とメカニズムを多角的に分析する。

福村出版

東京・文京
小石川1-3

電話 (03)
3813-3981

定価は税込



有斐閣 出版案内

(定価は税込み)

東京・神田・神保町2/81:03-3265-6811

WOMEN'S DATA BOOK

女性のデータブック

井上輝子・江原由美子編

女性の現在を読む／

①女性のデータ・ファイル

(1)結婚・家族はどう変わったか…少産少死、独身・再婚

(2)性・こころ・からだ…初経から閉経まで、アル中…

(3)労働力と、賃金・量ともに向上…賃金、雇用管理…

(4)広がる教育機会…就職状況、生涯学習、学歴効果

(5)社会的活動の場…ライフステージと社会参加

(6)変わる男女役割…遅れて変わる男、働く母親…

(7)マスメディアの中の女性…雑誌接触、テレビ、広告

②戦後女性史略年表

A5判 カバー付318頁
定価2987円

心の習慣

アメリカ個人主義のゆくえ

ロバート・N・ペラー他 島菌進・中村圭志訳

『孤独な群衆』から四〇年、最良の現代社会分析

アメリカはどこへ行くのか？人びとが個人主義を信じて暮らしながら、孤独におちいるのはなぜか？本書はアメリカ人のライフスタイルと文化的伝統を解析し、セラビ

ー文化にひたるアメリカの今日と明日をみつめる。35万部を突破した衝撃のベスト&ロングセラー。三九一四円

ブルーム アメリカン・マインドの終焉 三〇九〇円

リースマン 孤独な群衆 三〇九〇円

東京文京本郷3丁目17-15

み・す・ず 書 房

第12巻

(ふーほ)新刊

四六倍判／定価一四、四二〇円(税込)

国史大辞典

全15巻

歴史知識の源泉

読む・見る・楽しむ。歴史百科辞典の決定版

総項目四万五千、日本歴史の全領域をおさめ、最新の研究を盛り込み、高度な内容をわかりやすく解説。文化・社会・文学・美術・宗教などの周辺分野からも必要項目を多数収録。(既刊)第1巻〜12巻Ⅱ定価合計一六二、七四〇円

吉川弘文館

東京都文京区本郷7-2-8・電話03-3813-9151

陶芸の技法

(新装版)

万葉の風土と歌人

●田村耕一著
定価2200円

●犬養孝編
定価3880円

下着の流行史

探訪日本書紀の大和

●青木英夫著
定価2880円

●鶴井忠義著
定価1980円

雄山閣

*価格は税込みです。

千代田区富士見2/振替東京3-1685

非売品

1991年6月20日発行 年4回発行 第61号

発行所 人文会 筑摩書房内

〒111 東京都台東区蔵前2-6-4

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印